

ジャケット作図の肩の追加寸法に関する一考察

—三角パッドを入れる場合—

小出 恵*

A Study on Shoulder Line Adjustment of Jacket Patterns

—In the case of Inserting Triangular Pads—

Megumi Koide

要 旨 シルエットは肩で決まる、と言われるほど、肩パッドはシルエット作りに重要な役割を果たしている。さらに今日では、シルエットを形作ること、シルエットを保ち型くずれを防ぐことなどシルエットの補強としての機能性も発揮している。

従来後ろに肩ダーツのある文化式婦人原型を用いてジャケット作図を行う時、後ろ肩ダーツをたたくで袖ぐり線に移動させ、肩先で上がった寸法を経験や過去の実績を基に、何センチかプラスする方法で作図してきた。しかし生地やいせ分量によっても変化し、定型化された準則も見当たらないので、今回使用肩パッドを三角パッドに限定し、肩先での追加寸法をデータ化し、経験の乏しい学生でも容易に作図できることを目的に、本研究をおこなった。

その結果、前肩先での追加寸法は、肩パッドの厚さが2.0cmまでは、肩パッドの厚さの半分がよく、これを越える場合は、肩パッドの厚さの半分に0.5cmを加えるとよいことがわかった。また、後ろ肩先での追加寸法は、肩パッドの厚さの半分に1.0cmを加えるとよいことがわかった。

I はじめに

肩パッドは体型補正と、シルエット作りを目的に使用される場合が多い。

これまではジャケットやコートなどシルエット作りにも使われていた肩パッドが、今日ではブラウス、ニット類などソフトなシルエット作りでも使用され、様々なシルエットの形成に欠かせない重要な存在になっている。

従来後ろに肩ダーツのある文化式婦人原型を用いて作図を行う時、後ろ肩ダーツをたたくで袖ぐり線に移動させ、肩先で上がった寸法を経験や過去の実績を基に、いうならば勘を頼りに何センチかプラスする方法で作図してきた。し

かし生地やいせ分量によっても変化し、その寸法判定に決まりはなく、定型化された準則も見当たらないので、今回肩先での追加寸法をデータ化し、経験の乏しい学生でも容易に作成できることを目的に、本研究をおこなった。

II 研究方法

1. 肩パッドの変遷

肩パッドはいつ頃からどのようにして用いられるようになったのか、日本にはどのようにして入ってきたのか、その歴史について調べた。さらに、肩パッドが使用され始めてから現在に至るまで、さまざまな形の肩パッドがみられたが、普遍的に用いられているのは三角型の肩パッドであると認識した。

* 本学助手 被服構成学

2. 作図の分析

作図の傾向を探るために、S O - E N のスタイルブックの作図の中で、三角パッドを使用したセットインスリーブのジャケット作図に限定し、原型の前後肩先での追加寸法と肩パッドの厚さとの関係を調べた。これまでかっちりとしたシルエット作りを中心に使われていた肩パッドが、ここ10年あまりの間に、デザインイメージを表現するうえで欠かせない重要な存在になっていることから、1989年から1998年までの10年間の作図について分析した。その数は900点あまりにのぼる。

3. 作図及び実験服の作成

2でおこなった作図の分析結果をもとに、原型前後肩先での追加寸法を設定し、新文化式婦人原型（平成11年7月改定）9号サイズ（バスト83cm、背丈38cm）を用いて、ノーカラーのジャケット作図をおこなった。

肩パッドは、大別するとセットイン、ラグランの2種類になるが、今回使用した肩パッドは、セットインスリーブのジャケットにおいては最も一般的な三角パッドの中からジャケット、コート用 I C 2 0 0 を選んだ。厚さは1.0cm、1.5cm、2.0cm、2.5cmの4種類である。

実験服は、肩パッドの厚さごとに1.0cm、1.5cm、2.0cmでは各3枚ずつ、2.5cmでは5枚、合計14枚作成した。

試験布は、ジャケットを想定して厚手シーチングとした。諸元は表1に示す通りである。

表1 試験布の諸元

試験布	シーチング
素材 (%)	綿100
組織	平織
糸密度 (本/cm)	26×25
厚さ (mm)	0.34
硬軟度 (cm)	たて 5.1 よこ 4.3

4. 官能検査

3で作成した実験服を文化式ヌードスタンの4号サイズ（バスト82cm、ウエスト58cm、ヒップ88cm、背丈37cm）に着装させ、肩周辺のなじ

み具合及び肩パッドの厚さの適合度を検討するため、Schefféの一对比較法を用い、表2の条件のもと5段階評価点による官能検査を実施した。被検者はジャケットの作図経験のある女性30名である。

表2 官能検査の条件

方法	Schefféの一对比較法 — 順序を考慮する場合 —
実施日	1999年7月
光源	自然光
被験者	本学第2被服研究室教員 (30名)
評価	5段階

III 結果及び考察

1. 肩パッドの変遷

肩パッドについての文献、論文はほとんどみあたらず、日本ではいつ頃から使われるようになったのかは不明である。しかし、ヨーロッパでは古くから流行のシルエットを作るために、さまざまなパッドが使われてきたことから、肩パッドの歴史もかなり古いものだと考えられる。ヨーロッパでは肩を強調したスタイルが多く、特にいかり肩の服は16,7世紀に登場する。当時は男女がほとんど同型のジャケットを着ており、肩を強調する事が流行した。そのルーツは中世の騎士たちの鎧にあった。西洋の鎧は腕も胴もきっちりとした金属の板でできていたが、腕の運動の自由を図るために肩の部分での工夫が不可欠であった。このことから肩部分が誇張されるようになったという。これがジャケットに取り入れられ、肩に詰め物を入れたパフをつけたいかり肩の服となった。1930年代初めにはイギリス人デザイナーのエイドリアン・カートメルが女優のジョン・クロフォードのためにデザインした肩パッド入りの肩幅の広い服をきっかけとして肩パッドが人気を呼んだ。1940年代は第二次世界大戦の影響からミリタリー룩が流

行し、いかり肩の服が多くみられた。しかし、1947年にフランス人デザイナーのクリスチャン・ディオールによって発表されたニュー・ルックで、それまでの幅が広く四角い肩から丸みのある女性的な肩線へと変化した。その後1957年まで、ほぼ毎シーズンのように新しいラインを打ちだしたが、一貫してなだらかな肩線だった。1960年代、1970年代は、ヒッピー・ルックが若者を中心に世界中に広まり、肩パッドの使用は減少した。1980年代から1990年代にかけて、ファッションはめまぐるしく移行し、流行のシルエットにあわせて、肩パッドもさまざまな形が作られている。

肩パッドの歴史を振り返ってみると、日本では1920年代に入り、生活改善運動、生活の合理化が盛んとなり、ようやく上流富裕階級から一般市民への洋装化が広がり始める。そして関東大震災のあった1923年頃から洋服の実用化が進み、一般市民の洋装化がさらに広がる。1933年頃には戦争を背景にして肩を強調したミリタリールックの流行がおこる。服装研究装苑の創刊号にもいかり肩の流行が登場する。「スーツには必ず肩台」¹⁾「肩の中にどんなに薄い絹物でも綿の布団」²⁾という表現もあり、日本には洋服と肩パッドはセットで入ってきたと思われる。肩パッドが肩台、肩綿として文章上に初めて登場するのは1939年1月号である。3月号では図と付け方が、5月号には作り方が掲載されている。当時は各自の体型や作品の素材などにより、手作りの肩パッドが使用されることが多かった。1941年2月号、1947年1月号には作図も掲載されている。その作り方は図1に示すように、ガーゼのような薄手の布のバイアスを図1-①のような大きさに裁断し、その上に薄くそいだ綿を中心が高くなるように積み重ねる。これを半分に分けて折り、粗い目のハ刺しで止め、周囲をかがるか、ぐし縫いをして仕上げる、というものであった³⁾。

このようにかつては体型補正と縫い目の補助のために使用されていた肩パッドが、今日では肩を強調したり、丸みを持たせたりとシルエット

トの補強に用いられ、デザインのイメージを生かす目的が多く、感性が要求されるようになって

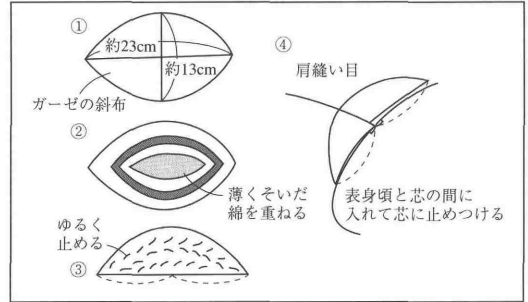
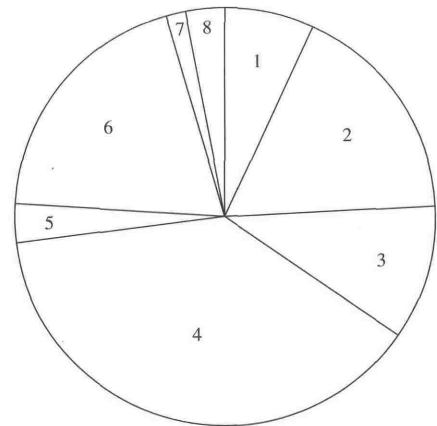


図1 肩綿の作り方とつけ方

ている。

2. 作図の分析

図2-1が示すように、10年間を通して使用頻度が高い肩パッドは、1.5cmのものである。これは全体の約38%を占めている。次いで2.0cm約20%、1.0cm約17%となり、この2種は10年間を通じ平均して使われている。



データ番号	パッド厚さ (cm)	使用数(個)	%
1	1.0以下	63	6.9
2	1.0	158	17.3
3	1.2	95	10.4
4	1.5	351	38.4
5	1.8	27	3.0
6	2.0	178	19.5
7	2.5	14	1.5
8	その他	27	3.0
合計		913	

図2-1 肩パッド厚さ別資料数

次に図2-2を見ると、肩パッドの使用は1995年から減少してきている。1.5cmのパッドは、全体の流れと同様に1995年以降減少傾向にある。1995年以降は使用頻度の順位が入れ替わり、それまでほとんど使用されていなかった1.0cm以下の薄手パッドの使用が目立つようになり、1995年以降の割合で見ると約26%となっている。また、1.0cm約19%、1.2cm約19%とあわせると約64%を占め、今日では薄手パッドを用いたナチュラルなラインが主流となっている。

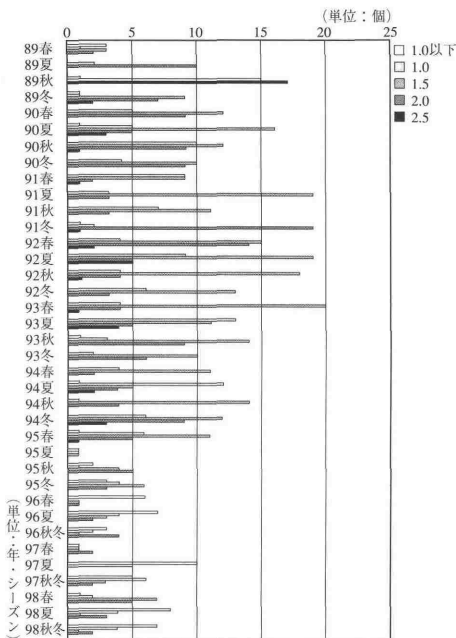


図2-2 年シーズン別三角パッド出現数

図3は作図を肩パッドの厚さごとに分類したもので、ジャケット用としておもに販売されている厚さ1.0cm、1.5cm、2.0cm、2.5cmの4種類である。原型前肩先での追加寸法は、肩パッドの厚さのいかんにかかわらず多い順に1.0cm、0.5cm、0.7cmで、原型の後ろ肩先での追加寸法は、1.5cm、1.0cm、2.0cmとなっている。追加寸法の前後のバランスをみると、後ろ肩先での追加寸法が多い結果となっている。

このことから、原型後ろ肩先での追加寸法と

原型前肩先での追加寸法の差を、後ろ肩ダーツの処理分量と仮説をたて、後ろ肩ダーツの処理分量を、<原型後ろ肩先での追加寸法-原型前肩先での追加寸法>とした。肩パッドの厚さ別にこの分量の最も多いものをみると、1.0cmでは前後とも1.0cmずつ追加していて前後差がない場合が29.7%、1.5cmでは前1.0cm後ろ1.5cmでその差0.5cmが21%、2.0cmでは前1.0cm後ろ2.0cmでその差1.0cmが23.5%、2.5cmでは前1.0cm後ろ2.0cmでその差1.0cmが35.7%となっている。どの厚さにおいても、原型前肩先での追加寸法は、1.0cmが多くなっているが、<原型後ろ肩先での追加寸法-原型前肩先での追加寸法>では、前後差がない場合、差が0.5cm、差が1.0cmの3種の占める割合が多くなっている。

新文化式婦人原型の後ろ肩ダーツの処理に伴う肩先の変化は表3の通りである。このダーツ分量は9号サイズ(バスト83cm)のものである。

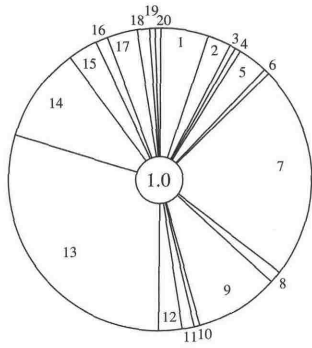
表3 バスト83cmの場合のダーツ処理

(単位 cm)					
ダーツ分	たみ分量	いせ分量	後ろ袖ぐり線での間さ	肩幅のカット	肩先の上がり
1.8	1.8	0.0	1.6	1.7	1.5
	1.5	0.3	1.3	1.4	1.3
	1.3	0.5	1.1	1.1	1.0

3. 作図及び実験服の作成

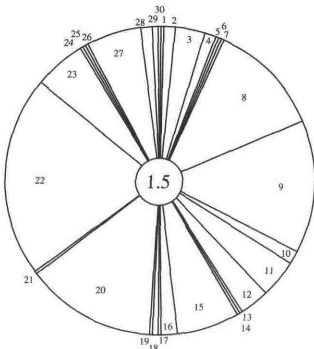
以上の結果をふまえて、原型前後肩先での追加寸法を表4のように設定した。実験服の作図は図4に示すように前身頃では原型の胸ダーツ分量の1/3をゆとり量とした。前肩先はパッドの厚さの半分を、後ろ肩先はパッドの厚さの半分にダーツの処理分量としての寸法を加えた作図をおこなった。その寸法はダーツの処理分量で最も多かった①前後差なし(0.0cm) ②0.5cm ③1.0cmの3種とした。

これを肩パッドの厚さごとに各3枚ずつ、合計12枚の実験服を作成し、スタンに着装させ肩周辺のなじみ具合、肩パッドの厚さの適合度及び肩縫い目の位置等を検討した。ところが肩パッドの厚さ2.5cmでは、後ろ肩先での追加寸法が最も多い③1.0cmでもS.P(ショルダーポ



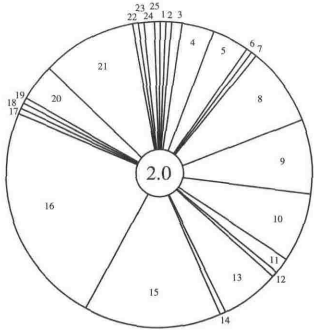
パッド厚さ 1.0

データ番号	前	後ろ	後ろ-前	使用量	%
1	0.0	1.0	1.0	8	5.1
2	0.0	1.5	1.5	4	2.5
3	0.5	1.0	0.7	1	0.6
4	0.5	0.0	-0.5	1	0.6
5	0.5	0.5	0.0	5	3.2
6	0.5	0.8	0.3	1	0.6
7	0.5	1.0	0.5	36	22.8
8	0.5	1.3	0.8	2	1.3
9	0.5	1.5	1.0	14	8.9
10	0.5	2.0	1.5	1	0.6
11	0.7	1.0	0.3	2	1.3
12	0.7	1.5	0.8	4	2.5
13	1.0	1.0	0.0	47	29.7
14	1.0	1.5	0.5	16	10.1
15	1.0	2.0	1.0	5	3.2
16	1.2	1.2	0.0	2	1.3
17	1.5	1.5	0.0	5	3.2
18	1.5	2.0	0.5	2	1.3
19	1.5	2.5	1.0	1	0.6
20	2.0	0.7	-1.3	1	0.6
合計				158個	



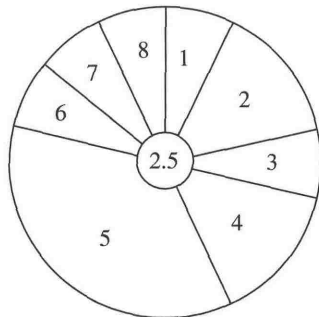
パッド厚さ 1.5

データ番号	前	後ろ	後ろ-前	使用量	%
1	0.0	0.7	0.7	1	0.3
2	0.0	1.0	1.0	4	1.2
3	0.0	1.5	1.5	11	3.1
4	0.0	2.0	2.0	4	1.2
5	0.3	1.5	1.2	1	0.3
6	0.5	0.5	0.0	1	0.3
7	0.5	0.7	0.2	1	0.3
8	0.5	1.0	0.5	42	11.9
9	0.5	1.5	1.0	49	13.9
10	0.5	1.8	1.3	5	1.4
11	0.5	2.0	1.5	14	4.0
12	0.7	1.0	0.3	11	3.1
13	0.7	1.2	0.5	1	0.3
14	0.7	1.3	0.6	1	0.3
15	0.7	1.5	0.8	23	6.5
16	0.7	2.0	1.3	6	1.7
17	0.8	1.5	0.7	2	0.6
18	0.8	1.5	0.7	2	0.6
19	1.0	0.0	-1.0	1	0.3
20	1.0	1.0	0.0	48	13.6
21	1.0	0.0	0.2	1	0.3
22	1.0	1.2	0.5	74	21.0
23	1.0	2.0	1.0	19	5.4
24	1.0	2.5	1.5	1	0.3
25	1.2	1.2	0.0	1	0.3
26	1.5	1.0	-0.5	1	0.3
27	1.5	1.5	0.0	4	1.2
28	1.5	2.5	1.0	2	0.6
29	1.5	2.5	1.0	2	0.6
30	2.0	2.0	0.0	1	0.3
合計				351個	



パッド厚さ 2.0

データ番号	前	後ろ	後ろ-前	使用量	%
1	0.0	1.0	1.0	1	0.6
2	0.0	1.5	1.5	1	0.6
3	0.0	2.0	2.0	2	1.1
4	0.5	0.5	1.0	6	3.4
5	0.5	1.0	1.5	7	3.9
6	0.5	1.1	1.6	1	0.6
7	0.5	0.7	1.8	1	0.6
8	0.5	1.5	2.0	15	8.3
9	0.7	0.8	1.5	14	7.9
10	0.7	1.3	2.0	13	7.3
11	0.7	1.8	2.5	3	1.7
12	0.8	1.2	2.0	1	0.6
13	1.0	0.0	1.0	11	6.2
14	1.0	0.2	1.2	1	0.6
15	1.0	0.5	1.5	26	14.5
16	1.0	1.0	2.0	42	23.5
17	1.0	1.5	2.5	1	0.6
18	1.3	0.2	1.5	1	0.6
19	1.5	-0.5	1.0	1	0.6
20	1.5	0.0	1.5	7	3.9
21	1.5	0.5	2.0	18	10.0
22	1.5	1.0	2.5	1	0.6
23	2.0	-1.0	1.0	1	0.6
24	2.0	0.0	2.0	2	1.1
25	2.0	0.5	2.5	1	0.6
合計				178個	



パッド厚さ 2.5

データ番号	前	後ろ	後ろ-前	使用量	%
1	0.5	2.5	2.0	1	7.1
2	0.7	1.5	0.8	2	14.4
3	0.7	2.5	1.8	1	7.1
4	1.0	1.5	0.5	2	14.4
5	1.0	2.0	1.0	5	35.7
6	1.0	2.5	1.5	1	7.1
7	1.5	3.0	1.5	1	7.1
8	2.0	3.0	1.0	1	7.1
合計				14個	

図3 肩パッド厚さ別分析結果

表4 原型前後肩先での追加寸法案

		(単位 cm)				
		肩パッド厚さ				
追加寸法		1.0	1.5	2.0	2.5	記号
後ろ	肩パッド厚さ/2+0.0	0.5	0.75	1.0	1.25	①
	肩パッド厚さ/2+0.5	1.0	1.25	1.5	1.75	②
	肩パッド厚さ/2+1.0	1.5	1.75	2.0	2.25	③
	肩パッド厚さ/2+1.5				2.75	④
前	肩パッド厚さ/2	0.5	0.75	1.0	1.25	①

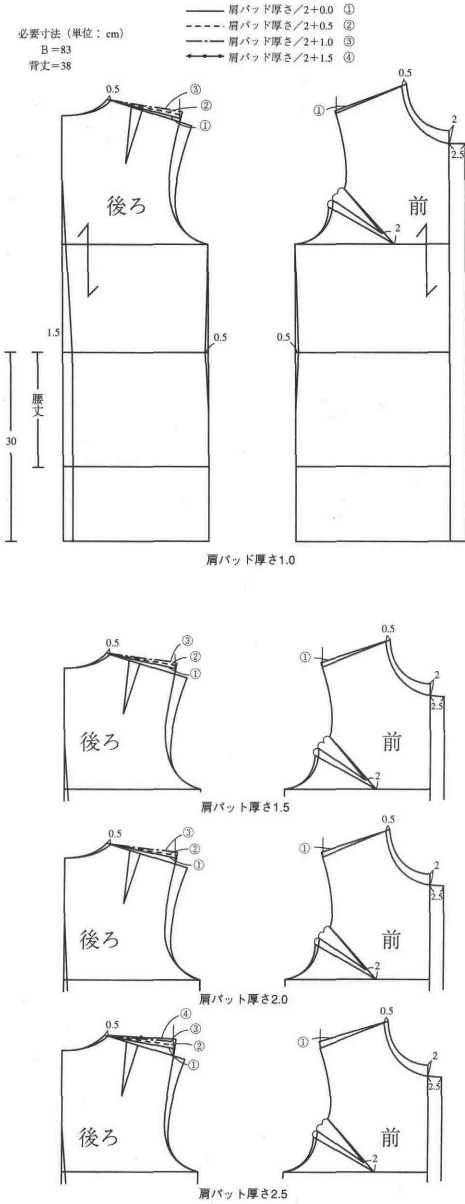


図4 実験服の作図

イント 以下S.P)での寸法不足からS.N.P (サイドネックポイント 以下S.N.P)にうきが認められた。そこで肩パッドの厚さ2.5cmの場合のみ、後ろ肩先での追加寸法に④1.5cmを追加することにし、合計13着とした。

4. 官能検査

合計13着の実験服で一対比較による官能検査をおこなった結果は図5に示すように危険率1%以下で有意差が認められた。図6のようにどの厚さの肩パッドでも原型の後ろ肩先での追加寸法の多いもの③1.0cm、④1.5cmがよい結果となった。原型の後ろ肩先での追加寸法の足りないもの①前後差なし(0.0cm)②0.5cmはS.Pでの寸法不足からS.N.Pでのうきが目立っている。

肩パッドの厚さ2.5cmの場合は、原型の後ろ肩先での追加寸法1.5cmが肩のなじみ等が最もよい結果となった。しかし追加寸法が多すぎたため、肩線が前に回り過ぎの結果となり、肩線移動の必要が生じた。つまり後ろ肩先での追加寸法は、肩パッドの厚さの半分に1.0cmをくわえ、前肩先での追加寸法は、肩パッドの厚さの半分に0.5cmをくわえることとして、新たに実験服を作成し検討したところ、肩線、S.Pの位置もよいものとなった。

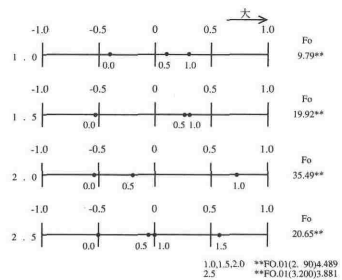
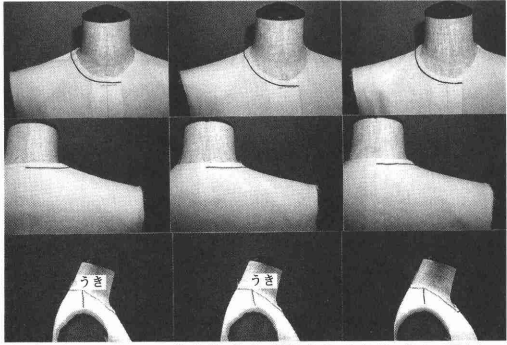


図5 主効果の推定値

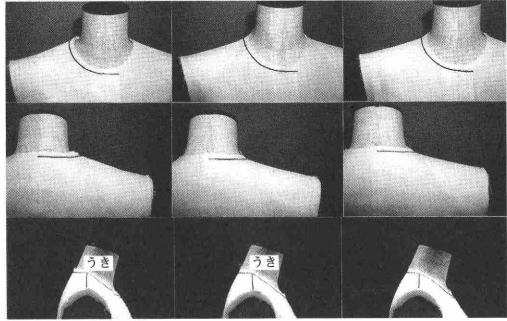


後ろ肩先=①パッド厚さ/2+0.0
前肩先=パッド厚さ/2

後ろ肩先=②パッド厚さ/2+0.5
前肩先=パッド厚さ/2

後ろ肩先=③パッド厚さ/2+1.0
前肩先=パッド厚さ/2

パッド厚さ=1.0

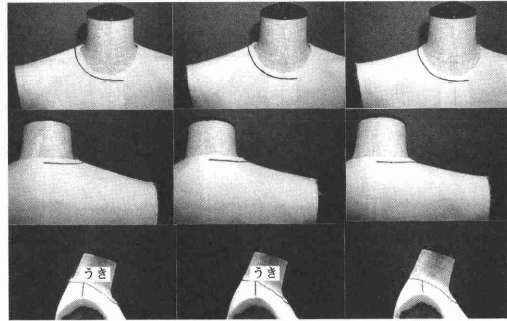


後ろ肩先=①パッド厚さ/2+0.0
前肩先=パッド厚さ/2

後ろ肩先=②パッド厚さ/2+0.5
前肩先=パッド厚さ/2

後ろ肩先=③パッド厚さ/2+1.0
前肩先=パッド厚さ/2

パッド厚さ=1.5

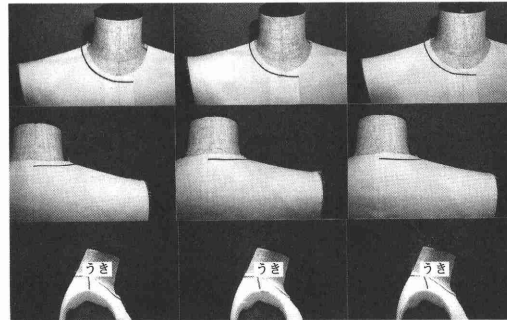


後ろ肩先=①パッド厚さ/2+0.0
前肩先=パッド厚さ/2

後ろ肩先=②パッド厚さ/2+0.5
前肩先=パッド厚さ/2

後ろ肩先=③パッド厚さ/2+1.0
前肩先=パッド厚さ/2

パッド厚さ=2.0

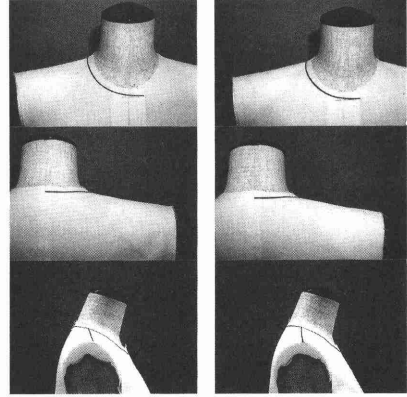


後ろ肩先=①パッド厚さ/2+0.0
前肩先=パッド厚さ/2

後ろ肩先=②パッド厚さ/2+0.5
前肩先=パッド厚さ/2

後ろ肩先=③パッド厚さ/2+1.0
前肩先=パッド厚さ/2

パッド厚さ=2.5



後ろ肩先=①パッド厚さ/2+1.5
前肩先=パッド厚さ/2

後ろ肩先=パッド厚さ/2+1.0
前肩先=パッド厚さ/2+0.5

パッド厚さ=2.5

図6 実験服着装状態

IV 総括

以上の結果から、

1. 肩パッドはシルエット作りに欠かせないものとして、洋服とともに導入されたと思われる。かつては体型補正と縫い目の補助のために使用されていたが、今日では肩を強調したり、丸みを持たせたりとシルエットの補強に用いられ、デザインのイメージを生かす目的が多く、感性が要求されるようになっている。

2. 原型の肩ダーツの処理によって上がる肩先の寸法を、S-O-E-Nのスタイルブックの作図900点あまりの分析結果から、その規則性を見いだそうとした。その結果、パッドの厚さのいかにかわらず、<原型後ろ肩先での追加寸法—原型前肩先での追加寸法>が、前後同じ場合①、後ろが0.5cm多い場合②、後ろが1.0cm多い場合③、の3種類が比較的多い結果となった。

3. 官能検査の結果、原型前後肩先での追加寸法は図7、表5のとおりとなった。前肩先での追加寸法は肩パッドの厚さが2.0cmまでは、肩パッドの厚さの半分がよく、2.0cmを越える場合は、肩パッドの厚さの半分に0.5cmを加えるとよいことがわかった。また、後ろ肩先での追加寸法は、肩パッドの厚さのいかにかわらず肩パッドの厚さの半分に1.0cmを加えるとよいことがわかった。

今回の研究では肩パッドの種類を三角パッド1種類とし、厚さを4種類に限定し、試験布は厚手シーチングとして検討をおこなったが、三

角パッドについては比較的好ましい結果を得ることができた。しかし、スタンに着用させての検討にとどまったため、今後は袖をつけての着用実験、実際の生地を用いての製作及び着用実験、他の種類の肩パッドとシルエットとの関係などについても調べてゆきたいと思う。

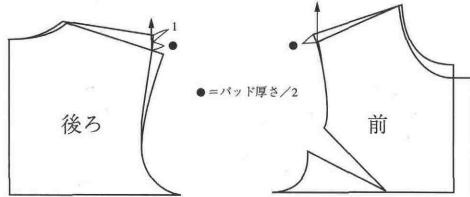


図7 原型前後肩先での追加寸法

表5 肩パッド厚さ別実験結果

(単位 cm)

厚さ	前肩追加寸法	後ろ肩追加寸法
1.0	0.5	1.5
1.5	0.75	1.75
2.0	1.0	2.0
2.5	1.75	2.25

最後に今回の研究にあたりご指導下さいました中屋典子教授に心から御礼申し上げます。

参考・引用文献

- 1) 服装研究装苑, 1939, 5, p33
- 2) 服装研究装苑, 1939, 1, p21
- 3) 服装研究装苑, 1942, 2, p14 ~ 15
- 4) 青木英夫: 風俗史からみた 1920 年代, 源流社
- 5) 青木英夫: 風俗史からみた 1930 年代, 源流社
- 6) 青木英夫: 風俗史からみた 194 ~ 50 年代, 源流社
- 7) 日本のレトロ 1920 ~ 1970 スタイルブック, 織部企画
- 8) 東京プレタポルテ 50 年史, 東京婦人子供服工業組合
- 9) S O - E N のスタイルブック (1989 ~ 1998), 文化出版局
- 10) 装苑 (創刊号 ~), 文化出版局
- 11) 佐藤信: 統計的官能検査法, 日科技連出版社